

ウルトラマン ビリーヴ

一刀菜耀

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大手トイメーカーに就職し張り切っていた新卒社員「銀河正輝（ぎんがまさき）」は奇妙な夢を見る。だがなぜかすつきりしないまま家を出ると、突如出現した怪獣に襲われる。

逃げ行く先に、彼は謎の男と巨人に出逢い、そして運命に導かれる。深まる謎が呼ぶのは新たな光かそれとも闇か…

これまでのウルトラマンを超える熱量でお送りする超大作！（の予定…）

目次

|     |     |   |
|-----|-----|---|
| 第二章 | 光   | 6 |
| 第一章 | NO. | 1 |
|     | 0   |   |

## 第一章 NO. 0

小さいころからウルトラマンが好きだった。人間では太刀打ちできない強大な敵に果敢に立ち向かう姿は、あの頃の僕にいつも勇気をくれた。

特に印象深いのは「ウルトラマンネクサス」だ。話を全て覚えてるか、と言われたら微妙だが、初めてウルトラマンを知ったのがネクサスであり、そのうえ別作品と一線を画した設定・デザインだったためか、これ以降の作品や昭和の作品を観た今でも最高のウルトラマンはネクサスだと思っている。

そんな一端のウルトラマンファンとしてもう22歳。18年近いキャリアを積んできたことになる僕はあの大手トイメーカー「バンダイ」に就職することができた。ウルトラマンに少しでも貢献できるよう精いっぱい頑張りたいと思う。

真新しいスーツをきっちり着こなした自分が鏡の中からこちらを見ている。自然と口元に笑みが浮かぶのがわかる。新しい挑戦が始まるってことを考えるだけで心が躍る。日の光さえいつもより優しく感じる。ああ。この感動を叫んでしまいたいくらいだ。…おっと、いけない。出勤の準備をしなければ。

時計を見ると鏡の前に立ってから10分近く経っている。淹れたでで熱かったコーヒ―は丁度いい温度になっていた。猫舌の僕はさすがとコーヒ―をすすりながら、天気予報だけでも見ておこうとテレビをつけた。

「n在、東京湾沿岸に超巨大未確認飛行物体が確認されています。周辺住民の皆様は自治体の避難勧告に従い、安全な場所に速やかに避難してください。繰り返しお知らせ…」

………意味がわからなかった。コーヒ―を床にこぼさなかっただけでも評価に値すると思う。

何が起こっているのか。自分はまだ夢の中にいるのではないか。明晰夢、というやつだろうか。それとも新手のドッキリか？

そうだったら仕掛け人は人選に失敗したようだ。テレビに映って

いるのは、色は銀色だが、間違いなくペダニウムランチャーを搭載した「キングジョー」の分離した飛行形態だったのだから。ファンとして見間違えるわけがない。

だが、そんなドツキリをわざわざただの新卒にかけてくるなんてありえない。やはりどこかの放送局の企画だろう。

「朝っぱらから何やってんだ。しかも平日に…」

…またまたおかしい。どのチャンネルにしても同じニュースだ。まさか本気で僕にドツキリを仕掛けてきてるのか？

テレビリモコンを置き、スマートフォンを手に取る。SNSに出ないければドツキリ決定……だ……。

出てる。ばっちり出てる。誰もが話題にしている。やはりキングジョーだと気付いた人が大勢いるようだ。トレンドはキングジョー一色だ。どうやらドツキリじゃなく現実らしい。

「一体どういう…」

僕が訝しむ声を上げると同時にテレビ内でも声が上がった。いつもは落ち着きのある声で淡々とニュースを読み上げるアナウンサーも今回ばかりは声が上ずっている。

「たった今現場に動きがあった模様です。東京湾沿岸に現れた未確認飛行物体は移動を開始したとのことです。あ、繋げる？現場から中継です」

映像が出る。なんてことだ。動いてる。あのキングジョーが。キングジョーが。飛んでる！

恐怖はなかった。いや、無いと言うと嘘になる。ただ、ほとんどなかった。あつたのはただただ驚きだけだった。

だが驚いて惚けている時間はそうなかった。銀色のキングジョーはほんの数秒で僕の住んでいるマンション付近まで飛んできたからだ。それだけならまだよかつたのだが、運の悪いことに飛んできただけでは終わらず、マンションまで800mあたりに着地してきた。その上銃口をこのマンションに向けてくるサービス付き。

テレビはもういらぬ。部屋から出て自分の目で見てみなくては。電源を切ろうとりモコンに手を伸ばしたそのときだった。

「キュイイイイイイイイン…」とモーターの駆動音のようなものが聞こえたと思うと 「ドゥー」とテレビの中のキングジョーの右腕のペダニウムランチャーが光を放ち、部屋の外、上階から同時に崩落音が聞こえてきた。

撃つたのだ。撃たれたのだ。

まずい。そう思い何も持たず部屋を飛び出したのと、視界が真っ白に光で塗りつぶされるのはほぼ同時だった。

☆☆★

「……ッ！」

これまで生きてきた中で最も速く瞼を開けた。と思うくらいには素早い覚醒だった。

起き上がって部屋を見回すが、異常は見られない。布団を出てテレビをつけるが、どこも同じような殺人や議員の汚職、不倫問題についてを頭が固そうなコメンテーターたちが語っている。

「……………久々にリアルな夢だったな」

ほっとした。ため息をつきながらテレビを消した。

いくらなんでもキングジョーが現実に現れるはずがないんだ。しかも銀色。そんなキングジョーは存在しない。明らかに夢だとわかるじゃないか。馬鹿か。

まだ朝の6時だ。出社までは時間がある。少し落ち着こう。顔を洗って…コーヒーでも飲めば頭も起きるだろう。

だが、どんなにしても銀色のキングジョーが頭から離れない。商品化したい、と以前なら嬉々として構想を練っただろうが、なぜか今はそんな気分ではなかった。

僕は結局予定より早く家を出た。

☆☆★

ビルが反射する光がまぶしい。今日は夏日らしく、シャツが汗で肌に張り付き気持ち悪い。自然と視線が下がるのがわかって、無理矢理顔を上げる。目に飛び込んでくるビル群。だが、今の僕にはそれがすべてあのキングジョーに見えて、また視線を下げてしまう。最悪な1日になりそうだ。

そろそろ本社だ。厩橋を渡る前で背筋を伸ばす。こんな陰気じゃ失礼だ。

「よしー」

気合を入れて声を出す。準備は整った。さあ、『バシャーーン！』右手側の川が隆起し水が降ってくる。そして大きな影が思考と視界を遮った。

水の壁が取り払われると、そこにいたのは…ベムラーだった。間違いない。

ウルトラマン最初の敵。ウルトラマンのきっかけとなった怪獣。まごうことなきベムラーだった。

まだ夢を見ているのではないか。そんな疑問は、撥ねた水滴の感触、ベムラーがあげた叫び声にかき消された。

それまではただ何が起きているのかわからないような顔をしていた周囲の人も一斉に叫びながら散りだした。

だがそんな人々を気になげず、ベムラーは口を開く。喉の奥に青い光が見えた。

「まづっ…いー」

熱線発射の予備動作。理解した瞬間身体が動いた。橋のたもとの方へと横に跳ぶ。その一瞬後にもともと自分の立っていた場所を熱線が通り過ぎていった。

勢いをそのままに地面に転がった僕はすぐさま立ち上がると、もともと来た道を全力で駆け出した。なぜかあいつが自分を狙っていると感じた。

なんでだなんでだなんでだなんでだ。

足を止めずに振り返ると、こちらをむいたベムラーが次の熱線準備しているところだった。こちらに向けられたら、歩道の幅程度きれいに熱線は舐めとっていくだろう。もう無理か。そんなわけあるか！

道の端の店舗のドアを体当たりするように開けて中に入る。直後、熱線が歩道を焦土と変えた。

どうする!? どうする!? 建物の中でも意味はない。裸がシャツ1枚

装備状態に変わったレベルだろう。クソッ！

無人となっていた店内を突っ切り、裏口を探す。案外わかりやすい裏口から外へ出た。

はずだった。

転がるようにして出た先は日が照り付けじわじわと暑かった。

「なんっ」

目が慣れると、そこはどこかのビルの屋上だった。ヘリポートの上。そして僕の脇に誰かが立っている。想定外に想定外が重なりもう頭がパンクしそうだ。

「そうか。君は愚かだ。だが、その在り方は素晴らしいものだ」

脇の誰かがつぶやいた。どういうことだ…？僕は意を決してその誰か―男に問いかけた。

「あんたいったい誰だ…？」

初対面には敬語がマナーだが、構ってはいられない。おそらくこいつは何か知ってる。

「ウルトラマン」

その男は言った。

「は？」

訳が分からなかった。何を言ってるんだこいつは。

「おいなに言ってるん…」

僕の言葉は男の眼下を指さす動きによってないものとされた。

ゆっくりと男の指さす方向に目をやって、僕はこの先の人生でこれ以上は味わわないであろう衝撃を受けた。

「嘘…：…だろ…：…？」

視界に飛び込んできたのは、厩橋を挟んで立つベムラーと光の巨人。

そうそれは…

『ウルトラマン』だった。



## 第二章 光

「なんで…どうして…?!」

間違いない。あれはどうみてもウルトラマンだ。遠目では何のウルトラマンかはわからないが、確かにあれはウルトラマンだ。

「彼は死を選んだ。その志は美しい」

男は淡々と、しかしどこか悲しげな声でつぶやいた。その言葉に僕は勢いよくその男の顔を仰ぎ見た。

若い。30代前半くらいの男だろうか。声はしなやかだが、そのなかに一本筋が通ったかのような張りを感じる。緑がかった黒いフレームの眼鏡の奥からは物憂げな視線が遠くのウルトラマンへと向けられている。

銀髪が交じった男の黒髪が風に揺れた。僕は観察をやめ、男に問いかけた。

「死ってどういうことだ。あれはなんだ。なぜ僕を襲ってきた。お前がここに僕を跳ばしたのか。その前におまえは誰だ」

聞きたいことが多すぎてぐしゃぐしゃに質問してしまった。だが、男は怒る様子もなく口を開いた。

「彼…ウルトラマンは死ぬ。光が足りない。あと持って2分、いや3分か。だが相手は万全の状態の…ベムラー。甘くはないだろう」

彼は一度口を閉じると、数秒おいて再び口を開いた。  
「よって遅かれ早かれ彼は死ぬ」

話についていけない。質問したにもかかわらず。ウルトラマン、ベムラーがいるということにもだが、それ以上にウルトラマンが死ぬということに。嘘をついているようにも見えないし、ここで嘘をつく必要もないだろう。もうドツキリの可能性だなんだと言ってはいただけない。

「私は見つめる者。見続けることしかかなわない。しかし形持つものに彼を導かせることは出来るだろう。美しくとも彼が死ぬことは望まれることではない。願わくば絆が光を導かんことを」

「おい、どういふことだ。意味が分からない。絆が光をってどういう

ことだ」

一步男へと迫る。話が見えてこない。すべてに答えてもいないばかりか、何を言ってるのかさえ分からない。

男―見つめる者は未だに視線を逸らさず、橋を挟んで対峙した2体をじつと見つめている。

「おい―」

するといきなり男は手を伸ばし、僕の頭を鷲掴みにした。突然の出来事で、武術の心得などほとんどない僕は対応しきれなかった。

「ネクサス…」

意識が急速に奈落の底へ落ちていく中、僕の聴覚は最後にその言葉を捉えた。

光同士がぶつかる音と共に。

☆☆★

「……っ!？」

気付くと森の中で横になっていた。このパターンは2度目だ。だがもう夢とは思えない。熱線の熱さ、ビルの上の風。すべてが夢とは思えない。

「……は…どこだ…?」

起き上がり周りを見渡す。振り返ったとき、僕は驚愕し度肝を抜いた。今日は驚愕しっぱなしだ。寿命が縮んだのではないだろうか。

そこには「ストーンフリーゲル」が横倒しになっていた。

ストーンフリーゲルとは、ウルトラマンネクサスで登場するネクサスへの変身者―デュナミスト―だけが搭乗できる石棺?のようなものと言えはいいのだろうか。通常であればネクサスの神殿、と呼称される場所で石碑のように建っているが、デュナミストの召喚に応じて飛来し彼らを格納、ダメージの治療を行う。ただし、回復できるのは肉体の損傷のみであり、蓄積する根本的なダメージ、精神的ダメージは治療できない。らしい。

などと説明を思い出している場合じゃない。普段ならば神殿に安置されているはずのこれがなぜここに…?しかも片翼は崩壊し、機体先端も欠けてしまっている。

ウルトラマンも怪獣もいた。ネクサスがいてもおかしくないが、ストーンフリーゲルはこの有り様。おまけに神殿はないときた。その上、僕は生きる希望があり、迷いもない。デユナミストの資格はないはずだ。

だが、これはここにある。僕の目の前にある。それに……なぜかわからないが泣いている気がした。このままではストーンフリーゲルが朽ち果て、ネクサスが失われるような気さえた。

僕の体は勝手に動き、ストーンフリーゲルに寄り添っていた。

「大丈夫だ。ネクサスは終わらない。終わらせない。だから……」

機体に触れた両手の下から暖かい光を感じた。僕はその光をしっかりと受け止め、強く、強く、願いを込めた。

「あきらめるな……!!!」

そのとき、光はストーンフリーゲルを満たしあふれた。その濁流に身体を預ける。

「今助ける。絆を、つなぐー!」

僕は光に包まれた。

☆☆☆

「デユアツ……!」

声とともにその巨体は倒れ、ビルを押しつぶした。

「ギエエエエエ、ギエエエエエエエ」

黒板を爪でひっかくような声をあげながら、ベムラーはウルトラマンを見下ろした。

ベムラーが口を開ける。喉の奥に蒼い炎が見えたと思つた次の瞬間には5連続の火球がウルトラマンを襲つた。

「デユ……ア……」

立ち上がる寸前を狙つた火球はすべて命中。ウルトラマンを再び地に伏せさせた。

脅威の対象からウルトラマンを外したのだろうか。ベムラーは何かを探すように辺りを見回し始めた。

右。左。また右。左を通つて後ろ。そして前。

「ギエ〃エ〃エ〃エエ〃エエ〃エエエエエ〃エ〃ン!!!」

一際強く叫ぶと、ベムラーは狂ったように火球を周囲に飛ばした。建設中の高層ビルが真ん中あたりで折れ、乗り捨てられた車が宙を飛び、街路樹が焼け悲鳴に似た音を上げる。そこにあつたのは地獄。

そう誰も逃れることのかなわない『闇』

しかしその直後、知性のない悪鬼は目撃することとなる。闇を裂く光をたたえる何かを。

☆☆★

「みんな！大丈夫だよ。絶対助かるから。安心して…」

ベムラーより距離200mにある幼稚園。避難を要請したが未だレスキュー隊は来ず。

「ママー！ママー！」「怖いよやだよ…やめてよ…」「ママー助けてー！怖いよー！」

一階端の大ホール内には園児たちの泣き声、叫び声、助けを呼ぶ声が幾重にも重なって聞こえていた。

ここでは、3人の20代中ほどの女性保教諭、給食調理担当の50代と60代の女性が1人ずつ、そして白髪交じりの髪をきれいに整えた60代の女性園長が1人の計6人が50数名の園児を匿っていた。

登園時間のズレから全園児の半分ほどしかまだ園にいなかったのが不幸中の幸いだろうか。6人はそれぞれで園児たちを元気づけながら救助を待っていた。

いつまでも来ない救助にしびれを切らした体育担当の男性保教諭は、助けを呼んでくるといつて出て行ったが帰ってこず。園児たちの送迎バスとも未だ連絡が取れない。最悪の状況だった。

「大丈夫。大丈夫。すぐ助けが来るからね…」

この言葉を言うのは何回目になるだろうか。

新任としてこの幼稚園で働き始めてまだ日の浅いこの女性は、経験したことのない異常と園児たちのフロローからくる疲れで、そうそうに精神的に疲れ切っていた。

「真樹先生、災害用の飲料水を運ぶので手伝ってください。日野先生もお願いします。花田先生はここに残ってください」

園長が不意に立ち上がりながら彼女を含めた2人を呼んだ。

「はい。わかりました……」

本当なら動きたくはないが、そんなことは言っていられない。と、彼女は自分を奮い立たせて一気に立ち上がる。首から下げた新しい名札に書かれた「まきせんせい」の文字が揺れる。背筋を伸ばして気合を入れ、園児たちを踏まないように気を付けてホール内の押し入れ兼倉庫へと進み、園長とともに引き戸を開ける。薄く埃を被った「災害用飲料水」と明記された段ボール箱がいくつも積み重なって置いてあるのがわかった。

全園児分の倍の量は置いてあるはずなので、無駄遣いしない限りは十分に持つてくれるだろう。非常用食料もあつたが、時間的にまだ開けるのは早いだろうとそちらは無視する。

1箱に500ml×20本が入った段ボール箱を3人で協力して4つ運び出したところで、ホール内の園児を集めた反対側に位置している園庭側につながる大きなスライド式の窓が2、3度強く叩かれた。

予想外の音に反応してホール内の多くが窓のほうに視線を向ける。1部の園児は短い悲鳴を上げて頭を覆った。一番窓に近い所にいた調理師の女性は背後にその園児たちを隠すようにして窓のほうを振り返った。恐怖その他のマイナスな感情は一瞬で収まった。

「開けてください。私です。高尾です。助けを呼んできました!」

そこに立っていたのは、助けを呼びに行つたまま連絡のつかなかった教師の「高尾学」だった。彼の後ろには、自衛隊だろうか。迷彩服を纏い黒つばいヘルメットを被つた男性が3名、乗つてきた草色のキャブオーバートラックから降りてくるのが見える。

「先生……」

園長が驚きと喜びの入り混じつた声で呼ぶと同時に他の大人たちも動き出した。

調理師の女性が窓の鍵を外し戸を開ける。

「何度も電話したんですよ。何かあつたのかと心配しました」

園長が詰め寄り、静かにだが力強く叱責する。

「すみません。なぜか携帯が圏外になってしまつて。でも、途中で自衛隊の人を見つけたことができて、とにかく必死で」

「わかりました。とりあえず避難が先です。園児は何人乗れますか？」

「応援がくるとのことなので、とりあえず10人ほどでしょうか…早くくしないと」

ギエ“エ”エ“エエ”エエ“エ”エエエエ“エ”ン!!!!

突然、悪魔の鳴き声が降り注いだ。

とっさに目を瞑ったり頭を覆ったりした彼らが次に目にしたのは、爆散し飛来する火球だった。

ある者は、瞬き一回にも満たないような時間の中で死を悟った。

ある者は、痛みを感じる間もなく燃え尽きるのを確信した。

ある者は、おとなしく死を待ただけだと自らの運命を悲観した。

だが、誰の絶望も成就することはなかった。

光のベール、まるでオーロラのような揺らめきを携えた何かに死はかき消された。

その場の全員。一人の例外もなく全ての者が空を見上げていた。

光が収まり、その何かが正体を現しても彼らは動くことさえできなかった。

そう。そこにいたのは彼らの知らない存在。

だが我々は知っている。そのかつて見た奇跡の勇者を。

伝説の名をここに記そう。その名は、

「ウルトラマン」